

生殖医学の観点から古代史を探る

江本 精

国際医療福祉大学 臨床研究センター／福岡山王病院 予防医学センター

古代においてどのような医術・医療が成されていたのか、考古学的史料が極めて少ないため、大いなる謎のままである。「生殖医学(主として産婦人科学)」とは「子孫を作る」ということに関わる全ての課題を探求する科学分野であり、「種の保存」という生命の大命題を預かる領域である。この中には、不幸にも、流産や早産などの異常や新生児死亡、母体死亡という最も残念な結末のものも含まれる。医学・医療が未発達な古代では、「子を産み、育てる」という過程の中には現代人が想像する以上の喜びと苦しみ、祈りがあり、それが我が国固有の宗教観の一部を形成していった可能性がある。本稿では、生殖医学の観点から謎の多い日本古代史を探ることにより「生殖考古学」という新たな展開が生まれ、それが古代医学史を究明する一助になればと考えている(江本 精:大塚薬報2014, 大塚薬報2016)。

まず、我々日本人の心や魂の拠り所である「神社」の形態についてであるが、神社は妊娠した女性の生殖器、つまり子宮を表現していると私は考えている。そして、ご神体である「鏡」は胎盤をモチーフとして、「勾玉」は胎児を、「しめ縄」はへその緒(臍帯)をモデルとして作られたのではないかと推察している。つまり、古代では、神社は新しい生命が生まれる聖域であり魂が再生される神域であると考えられた。安産祈願や出産後のお宮参り、さらに、生まれた赤ちゃんのへその緒を一生大事に保存する風習は日本固有の文化である。次に、まだ十分に解明されていない我が国の「古墳」についてである。女王が君臨した3世紀に出現した「前方後円墳」は、その形状と玄室の配置から「子宮」を模倣して築造したのではないかと考える(2017全国邪馬台国連絡協議会にて講演)。その論拠として、現在でも琉球地方の伝統的な墓である亀甲墓(カミヌクー)は、女性の子宮の形を模倣していることは学術的にも明らかで、上述した古代の原始的信仰の痕跡と考えられる。古代人が子宮の形を模倣して前方後円墳を造った理由は「魂の再生」に対する強い願いであろう。「王や女王の亡骸を子宮に戻して再び胎児に帰れば、その魂は永遠に再生する」という古代東アジア人の独創的発想であろう。さらに、最近、海外でも評価が高い縄文時代に作られた「土偶」は日本芸術の原点と言ってもよい。土偶の多くは女性を表しており、そのむくんだ顔と体軀から推察して、土偶は妊娠中毒症(妊娠高血圧症候群)の妊婦をモチーフとして作られるようになったと私は考えているが、同様な推察は過去にただ一人、歴史学者の梅原猛氏によって成されている。古代の生活環境から考えて妊娠中毒症の頻度は想像以上に高く、多くの妊産婦が高血圧による子癇発作や脳出血で若い命を落としたと考えられ、土偶はそれに対する鎮魂の意味で作造したのであろう。次に、日本神話の中で「イザナギとイザナミの最初の子は骨無しの水蛭子だったので、葦船に入れて流した」という説話は生殖医学的にも大変興味深い。この有名な説話は単なる神話の一つではなく、蛭子が「胞状奇胎」であった可能性を示唆している可能性がある。そして、古代の英雄的皇子であるヤマトタケルの数多の伝説においても、ヤマトタケルが双子であればそれは伝説ではなく実在する事実として十分に説明できるし、実際に日本書紀には同皇子は双子として出生したという記述がある。日本の古代史にはまだまだ多くの謎があり、生殖医学の観点から古代を探ることは、今後の古代史研究や考古学の考案において新たな局面をもたらすであろう。私は、生殖医学と考古学の統合を初めて目指すものとして、ここに「生殖考古学」という新たな命題を掲げ、古代医学史解明の手がかりとしたいと考えている。